

## はじめに

日本国内、海外を問わず、皇室の行事の度に日本の伝統文化を新たな目で見直すことは、昨日今日の話ではないようです。五十年程昔、京都の有職故実ゆうそくこじつ もつぱを専らとする平安貴族の末裔の蔵で古文書に触れて以来、有職研究の道を歩むことになった私は、その後長年にわたり有職故実について講演をしてきました。その場では多くの質問が寄せられますが、必ず「装束がわかりやすい本がありますか」と訊かれます。有職装束について書かれたものは、いずれも専門書であり、平易な文章で説明してあっても理解するにはそれなりの基礎知識が必要です。



気楽にページをめくることができるファッション雑誌のような有職装束本はないのか……。

この度、創元社から「年齢性別を問わず、見るだけでも楽しめる、ちょっぴり古典にも触れられて、装束のことがわかる有職本」のご相談があり、「ページを開けば、そこにはコスチューム・ミュージアムの空間が楽しく広がる」をコンセプトとした『写真でみる 紫式部の有職装束図鑑』の出版となりました。平安時代から現代の皇室行事に伝承される有職文化に親しんでください。



仙石宗久

はじめに――2

平安装束Q&A 教えて！仙石先生――6

十二単を着せてみた――20

女性の有職装束――25

|               |    |
|---------------|----|
| 十二単（女房装束／裳唐衣） | 26 |
| 十二単（後ろ姿）      | 28 |
| 長袴            | 30 |
| 単             | 32 |
| 五衣            | 34 |
| 打衣            | 36 |
| 表着            | 38 |
| 唐衣・裳          | 40 |
| 檜扇            | 42 |
| 小桂（夏）         | 44 |
| 小桂（冬）         | 45 |
| 御小桂（昭憲皇太后御料）  | 46 |

|              |    |
|--------------|----|
| 小袖（大人用）      | 47 |
| 御縫御召         | 48 |
| 五節舞姫装束（大正時代） |    |
| 唐衣・裳         | 50 |
| 間着 張袴        | 52 |
| 単            | 54 |
| 內衣           | 55 |
| 表着           | 56 |
| 檜扇 帖紙 襪      | 57 |
| 髪上具          | 58 |



61

男性の有職装束――61

|           |    |
|-----------|----|
| 束帯        | 62 |
| 束帯の装束（二部） | 64 |
| 束帯の物ノ具    | 66 |
| 冠・烏帽子     | 68 |
| 束帯（後ろ姿）   | 69 |
| 衣冠装束      | 70 |
| 衣冠単       | 72 |
| 上級武官 束帯姿  | 74 |

宮中の遊び――113

|             |     |
|-------------|-----|
| 楊弓          | 114 |
| ふりふりを持つ御所人形 | 116 |
| 薬玉          | 118 |
| 龍笛・高麗笛      | 119 |
| 蹴鞠          | 120 |
| 双六          | 122 |
| 百人一首（かるた）   | 124 |
| 貝覆い         | 126 |
| 競馬香         | 128 |
| 毛植人形        | 130 |



有職装束の世界――132

紫式部とその時代――145

関係年表――156

|           |               |
|-----------|---------------|
| 有職装束●絵型図鑑 | 60・90・112・131 |
| 参考文献      | 157           |
| あとがき      | 158           |

●凡例

表紙・裏表紙・大扉＝有職文化研究所提供。

特にクレジット記載のない写真はすべて有職文化研究所提供。

本書に掲載した装束は江戸時代以降に復元されたもの、または江戸時代以降の宮廷装束です。

原文の引用については、「源氏物語」は、玉上琢彌＝訳注『源氏物語 現代語訳付き』、「紫式部日記」は、山本淳子＝編『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 紫式部日記』（ともにKADOKAWA）を主要参考文献にしました。

童の有職装束――91

|           |     |
|-----------|-----|
| 産着の細長     | 92  |
| 狩衣 指貫 横目扇 | 94  |
| 半尻        | 96  |
| 童水干       | 98  |
| 細長        | 100 |
| 童袍        | 102 |
| 汗衫ひとそろえ   | 104 |
| 童直垂       | 106 |
| 御縫御召（童用）  | 108 |
| 紅梅の小袖（童用） | 109 |
| 横目扇       | 110 |



あとかき

158

参考文献

157

有職装束●絵型図鑑――60・90・112・131

## 教えて！ 仙石先生

紫式部が生きた平安時代——十二単は知っているけど、その他の装束は知らないという人も多いかもしれません。平安貴族たちは一体どんなものを着ていたのでしょうか。ここでは、本書の著者で有職文化研究所主宰の仙石宗久先生に、平安装束の基本についてお聞きします。

### 紫式部について

#### Q 紫式部はどんな人だったのでしょうか？

仙石先生（以下先生） 紫式部は、父親である藤原為時が式部丞という官位に就いていたことからこう呼ばれています。紫式部の実家は裕福な貴族の家ではありませんでした。また、紫式部は幼少期に母親を亡くし、夫にも先立たれていますので、おそらく彼女が父親の食事や身の回りの世話をしていたのではないのでしょうか。ですから、着るものを楽しむ余裕はあまりなかったと思います。けれども実家の屋敷内ですから、人目を気にする環境ではありませぬ。無地の質素な桂（うづもき）（頁）などを着ていたとしても、それですんでしまうような生活だったと考えられます。

やがて三十代半ばになった頃、藤原道長の命によって、紫式部は道長の娘・中宮彰子に仕えることになり、宮仕えの暮らしが始まりました。



『紫式部図』（部分） 伝・谷文晁 絹本着色  
江戸時代・19世紀 128.6×56.3cm 東京  
国立博物館  
出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

#### Q 十二単は重くないのでしょうか？

先生 ズバリ、重いです（笑）。『源氏物語』の作者である紫式部は、当然のことながら筆を持つ機会も多かったはずですが、袖が重いと、長時間書き続けることはできないでしょうし、そもそも大きな袖は邪魔すぎます。そんな時はなんと、小袖より上の衣を片腕だけスルッと脱いでしまっていたのです。

また、十二単を一から着たり脱いだりするのには、人の手を借りなくてはならないのでとても面倒でした。どうしても脱がなければいけない場合は、実は座って帯を解き、両手をスルッと抜くと、まるごと体を抜くことができます。十二単をしょっちゅう着なければいけない女房は、「十二単の殻」を二つくらい用意していたのかもしれない。



平成31(2019)年まで毎年1月に行っていた有職文化研究所主催の会「衣紋はじめ」にて。十二単を着た女性が肩脱ぎをしている。

#### Q 十二単を着ていたのでしょうか？

先生 紫式部は中宮彰子に仕えるようになってから、表向きの席に出ることも増えたでしょうから、女房衣装として十二単を着る機会が増えていったはずです。けれども皆さんよくご存じのように、十二単は何枚も衣を重ねて着ます。その詳細は二十六頁以降を読んでいただきたいのですが、大人しく座敷に座っているだけならいざしらず、何か作業をする際にはどう考えても動きづらくなります。そこで、作業をする場合は、十二単の時に着る長袴ではなく、くるぶしまでの短い袴を身につけることもありました。TPOによってふさわしい服装を選ぶ——この感覚は私たち現代人となんら変わりありません。

一方で座ったままでもいることが多い場合は、長い袴をはいて足を見せないようにしました。この時代の女性は、決して手や足を人目にさらさないのがエチケット。物を受け取る時も直接手を差し出すのではなく、扇を差し出してその上に置いてやりとりをしました。

#### まとめ

- 父の世話をしていた紫式部は、出仕前は質素な日常着姿だった。
- 当代きっての権力者・藤原道長の命で出仕してから、十二単を着る機会が増えた。
- 『源氏物語』を執筆する時は、肩脱ぎをしていたかも？

## 装束の素材について

Q

現代の着物はいろいろな素材が使われますが、十二単は？

先生 十二単に使われるのは原則すべて絹です。他の装束も、稀に麻や葛、綿が使われることはありましたが、ほとんどが絹でした。綿はもともと日本に自生しておらず、平安時代の初めに中国から入ってきたようです。ところが国が栽培を奨励してもうまく育ちませんでした。当時は今よりも平均気温がずっと低かったと考えられており、綿栽培は日本の気候に合わなかったのでしょう。

Q

それでは、どんな絹が使われていたのですか？

先生 もっとも重用されたのは中国産の絹です。絹糸は細くて真っ直ぐなものが最良とされました。ところが当時の日本産の絹糸は曲がっていたり、こぶがあったりしたので、天皇の装束にはほとんど中国産の絹糸が使われていました。

奈良時代は繭玉を京都まで塩漬けにして運んでいました。なんとかわいそうな話なのですが、塩漬けにすると繭の中で蚕は窒息死してしまうのです。けれどもそのために、繭には熱を加えずに糸を引くことができました。

一方で現在の製糸は、繭のうちに茹でるなどして熱を加え、繭の中の蚕を殺してから糸を引いています。一見ツヤがあるように見えますが、熱を加えずに引いた糸と比べるとその品質は雲泥の差です。ちなみに絹糸の質は音で判断します。かせ状（束にした状態）の糸を握るとキュッキュッという音がするのです。専門家はこれを「絹が鳴く」と表現します。

実は僕も絹糸を一から作った経験がありますが、これはなかなか骨の折れるプロジェクトでした。人口飼料で育てた蚕だと、吐き出す糸が太いのです。細く真っ直ぐな糸を作ろうと思ったら、蚕に愛情をもって育ててくれる農家を探すところから始めなくてはいいけません。

### まとめ

●十二単は、原則として

すべて絹で作られていた。

●細くて真っ直ぐな、中国産の絹糸が最上のものとされていた。

●塩漬けにした繭玉から熱処理をせずに糸を引くと、ツヤのある絹糸になる。



有職文化研究所は、『源氏物語』に登場する装束を復元する「源氏物語プロジェクト」に携わった。写真は平安時代の方法で絹糸を作っているところ。  
写真：源氏物語プロジェクト

# 十二単を着せてみた

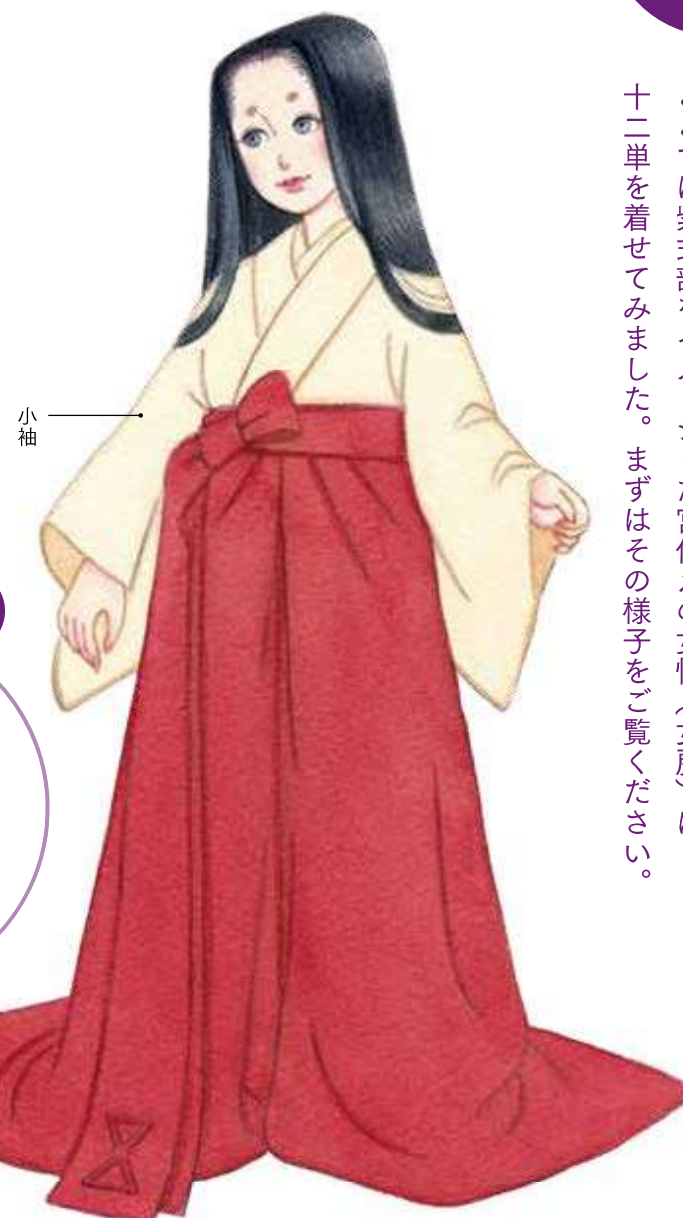
華麗な十二単は、多くの衣を組み合わせた一つの装束です。一体どんな衣をどんな順番で重ねているのでしょうか。ここでは紫式部をイメージした宮仕えの女性（女房）に十二単を着せてみました。まずはその様子をご覧ください。

イラスト／山本祥子

一

## 小袖を着て袴をはく

まず初めに、下着として着物の祖先である小袖を着ます。袴をはく前に指股のない足袋のような襪をはき、それから袴を付けます。十二単の下にはくのは長袴で、腰紐は右前で片結びにします。



小袖

長袴 (三十頁)

足元はこうなっています！



女房たちは足に襪（57頁）をはき、袴の裾を踏んで歩きました。

二

## 単ひとえを着る

単は男女とも、どの装束を着る際にも身につけますが、それはもともと、小袖が生まれる前までは単が肌着だったということに端を発します。十二単の「単」とはこれのことを指します。



単 (三十三頁)

じゅうにひどえ  
十二単

(女房装束／裳唐衣)

## 朝廷に出仕する女房の装い



何枚もの桂を重ねた上に唐衣をはおり裳をつけた十二単は、紫式部をはじめとした女房階級の正装です。

俗に十二単と呼ばれますが、古い記録にその記述はありません。十二単という言葉が出てきたのは『平家物語』で建礼門院徳子(※1)が壇ノ浦に身を投げるシーンで「藤がさねの十二単であった」と、記されたのが初めてです。この本では、一般に知られていることから「十二単」と呼びます。

十二単は、まず小袖を着て襦袢(五十七頁)をつけ、長袴(三十頁)をはき、単(三十二頁)を着ます。次に桂を五枚重ねた五衣(三十四頁)、打衣(三十六頁)、表着(三十八頁)、唐衣(四十頁)をはおります。最後に裳(四十頁)をつけて檜扇(四十二頁)を手にして完成です。女房たちは季節や祝いごとに合わせた、単と五衣の色の組み合わせに心をくだきました。これらのかさね色目(一四四頁)は、着る人の身分・教養・センスを表すものでした。

## ◆『紫式部日記』より

小大輔は紅一かさね、上に紅梅の濃き薄き、五つを重ねたり。唐衣、桜源式部は、濃きに、また紅梅の綾ぞきて侍るめりし。

## 現代語意訳

小大輔は紅の単の上に、紅梅がさねの桂を濃淡合わせて五枚、その上に桜の唐衣を着ていました。源式部は、濃い紅の桂を重ねた上に、紅梅がさねの綾の表着を着ておりました。

## ●解説

中宮彰子の第二子、敦良親王の五十日祝に出席した際、女房仲間のかさね色目を書きとめたもの。日記の中で、先輩女房から「センスが悪い」と指摘された仲間を、毅然とした口ふりでかばい、反論している。

※1 建礼門院徳子  
平清盛の娘で安徳天皇の母。平家の栄枯盛衰に自らの運命を翻弄された悲劇のヒロイン。「てげに」のりこ」とも。

# 十二単 (後ろ姿)

## 雅へ誘う——十二単の後ろ姿

唐衣と裳を付けた十二単姿の女房の後ろ姿です。正面からは見えない裳の優雅さがよくわかりますし、唐衣の折り返した襟の、薄紅の色味も美しいものです。

写真では、唐衣の裾に当てて付ける「大腰」、後ろに引く二筋の「引き腰」、八幅からなる「裂」が見えます。「裂」は白波形文の固地綾で織られており、「州浜に松の地摺絵」の美しさが際立ちます。

唐衣と裳には禁色があり、一定以上の身分の女性以外は、赤と青、現

代で言うところの「深い紅」と「黄緑色」の唐衣と、地摺(※1)の裳を自由に身につけることはできませんでした。

「禁色」とは特定の織・文様・色について、特に認められない限り、身分の定めをこえて身につけてはならないという決まりの総称を言います。したがって、必ずしも色のことにだけに限りません。そしてこの禁色は、勅許、すなわち天皇のお言葉で伝える公文書「宣旨」によって初めて聴かれるものでした。

◆『源氏物語』——行幸より

「とてもかうても、まづ御裳着の事をこそは」と思ひて、この御まうけ御調度の、こまかなる清らども加へさせ給ひ。

現代語訳

「どうなるにせよ、まず裳着の式(の準備をしよう)」とお思いになって、裳着の儀式に使うお道具類の、精巧で贅沢なものをお増やしになり。

●解説

玉鬘を諦めきれない光君は、妻にしようかと悩む。結局は尚侍として冷泉帝に出仕させることにして、彼女の裳着の儀の用意をする。この後、光君は内大臣に「玉鬘はあなたの娘です」と告白し、裳着の腰結役を頼む。これが玉鬘と内大臣の初めての親子の対面であった。



※1 地摺  
裳の地に、型紙で雲形や桐竹鳳凰文などをつけること。

# 束帯

男性の有職装束



## 宮廷儀式に参列する 男性貴族の装い

「束帯」は、天皇以下の文官・武官が公式の儀式や行事の際に着用した正装です。略式の束帯「衣冠」を、「宿衣装束」「宿衣衣」(※1)というのに対し、束帯は「昼の装束」とも呼ばれます。

束帯は、まず小袖を着て襦(五十七頁)をはき、冠(六十八頁)をつけます。次に大口の袴を履き、表袴(ともに六十五頁)に足を通します。単と袴を着て、表袴の腰紐で腰を留め、次に下襲(六十五頁)を着て裾をつけ、裾の腰紐で留めます。それから袍(六十五頁)をまとい、石帯で腰を留めます。さらに平緒を帯として太刀を佩き(※2)、檜扇・帖紙を懐中し、手に笏を持ち、かのくつをはいて完成です(石帯・平緒・太刀・檜扇・帖紙・笏は六十七頁)。写真はかのくつをはく前の束帯姿です。

束帯の袍には腋が縫われている「縫腋袍」と、縫われていない「闕腋袍」があり、後者は動きやすいように武官が着用し、前者は文官と三位以上の武官が着用しました。

◆『源氏物語』——賢木より

年もかはりぬれば、内わたり花やかに、  
内宴踏歌など聞き給ふも、  
もののみあはれにて、  
御行ひしめやかにし給ひつゝ、  
のちの世の事をのみ思すに――。

現代語意訳

年が明けて御所一帯も華やかになり、内宴だ、踏歌だと騒ぐのを聞きなされると、藤壺宮は感慨があふれ、ひっそりお勤めをしながら後世のことばかり考えていらつしやる――。

●解説

桐壺帝が崩御され、悲嘆にくれる藤壺宮。喪が明けて宮中が華やかさを取り戻し、行事が再開されても悲しみは癒えない。行事の際に男性貴族は束帯を着たが、光君の目の覚めるような正装姿も、藤壺宮の目には入らなかったに違いない。

※1 宿直衣  
宮中に宿泊する際に着用する簡単な装束の総称。  
※2 佩(は)く  
刃を下にして腰帯に下げること。

# 産着の細長

童の有職装束

## 出産祝いに贈る ベビードレス

「産着の細長」は、出産祝いに贈る、西洋で言うところの「ベビードレス」です。紫式部の時代は母方の実家が贈る慣習がありました。産着として赤ん坊が実際に着て、男女とも三〜四歳くらいまで身につけていたと言います。

ずっと時代が進んで江戸時代になると、出産祝いの贈答品となってきました。寸法も大きく、全体的に形式的なものとなり、実際に子どもが着ることはなくなっていったようです。

写真の「産着の細長」は、表が「白小葵文固地綾」、裏は「紫平絹の桜かさね」、単は「白小菱文固地綾」。室町時代の初期に、高倉永行が各種装束の基本的寸法と仕立て方を詳しく記録した『装束寸法深秘抄』(※1)に基づいて、当時の寸法と仕立てで復元されました。

注目すべきは首上(※2)の蜷結び(四十三頁)の絹糸。折紙の鶴や糸細工の松梅など、幼児の健やかな成長を願う飾り付けが施されています。



◆『紫式部日記』より

ある時はわりなきわざ  
しかけ奉り給へるぞ、  
御紐ひき解きて、  
御几帳のうしろにてあぶらせ給ふ。

現代語訳

ある時、親王様が道長様に難儀なことをされて、ひっかけてしまった。でも道長様は上機嫌で、直衣の紐を解き、几帳の後ろで女房に火であぶらせて乾かしなされた。

●解説

待望の初孫、男子誕生で喜びを抑えきれない藤原道長は、中宮彰子と乳母の元へしよちゅうやつてきて親王様をあやしている。道長が親王様におしっこをかけられた瞬間を捉えた、週刊誌記者のような紫式部の筆が冴える。生後一カ月の親王様は、産着の細長を着ていたかもしれない。

※1 『装束寸法深秘抄』  
高倉家伝来の図入り装束寸法書。  
※2 首上  
袍や狩衣の、首周りに沿って取り付けた部分。

# 有職文様の世界

装束の地につけられる文様を大まかに分類すると、「丸文」「立涌文」「櫛文」「菱文」「窠文」「霞文」「亀甲文」などが代表的なものとなります。

他にも「霞形」「朽木形」「州浜形」「青海波」などの文様があり、これらは総じて「有職文様」と呼ばれています。

## 丸文

何らかの図柄を円形に整えて、とびとびに配置するのが基本です。意匠するのは主に花や動物で、それによってさらに多くの種類に分かれます。例えば、「藤野丸」(i)「浮線綾丸」(j)「鶴丸」(k)「鸚鵡丸」(l)などがあります。また、二つの意匠を向かい合わせて一つの円に収める図案は、「向」(m)「抱」(n)といった言い方をすることもあり、左頁の「向鳳凰丸文」(o)などがそれです。

## 立涌文

ふくらんだりしぼんだりする複数の波線を縦方向に配置し、「立ち上り湧き上がる」動きを感じさせる文様です。波線のふくらんだところに盛り込む図柄によって、「雲立涌」(k)「松立涌」(l)「藤立涌」(m)などと分類も豊富です。

## 櫛文

複数の斜線が互いに交差し合う形をモチーフとするものです。この斜線を表現するものの違いで、「三重櫛」(c)、「鳥櫛」(n)、「菱櫛」(p)などがあります。

## 菱文

「幸菱」(a)「四菱」(b)「松菱」(入子菱)などたくさん種類があります。繁殖能力旺盛でめでたいイメージがある「菱」モチーフは、装束によく使われる文様の一つです。

## 亀甲文

地文として多様される文様です。正倉院御物にも見られるほど古くからあるものですが、特に平安時代中期以降、その吉祥ゆえに地文としてよく使われています。

## 窠文

窠文は、瓜を輪切りにした断面図を意匠化したものと言われます。その中に「花文」や「丁子文」を組み合わせたことが多く、また窠の輪のくびれ方によってもいくつかの種類が見られます。

この文様は、地文となる「霞文」と組み合わせることが大変多く、この場合は「窠に霞」(d)という名前がついています。

## 霞文

小さな正方形をびっしりと敷き詰めた形です。中国大陸の宮殿スタイルなど、敷石をイメージしたものと言われています。

## 小葵文、唐草文

「小葵文」(h)と唐草文も装束に多用される文様です。特に唐草文は、「輪無唐草文」(e)「轡唐草文」(f)「牡丹唐草尾長鳥文」(g)など、種類も豊富です。唐草文様は、もともと「パルメット」と呼ばれ、ローマ時代の遺跡の柱に施されていた文様です。それが奈良時代に大陸を通じて日本に伝来し、唐草文様となりました。西洋にも「アラベスク」と呼ばれる同種の意匠がありますが、どちらもありエントに起源を持つものです。

## 装束の代表的な文様



o 向鳳凰丸文



m 藻勝見文



k 雲立涌文



i 八藤の丸文



p 松喰鶴文



n 鳥櫛文



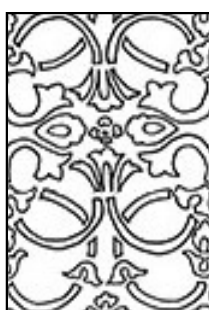
l 雲鶴文



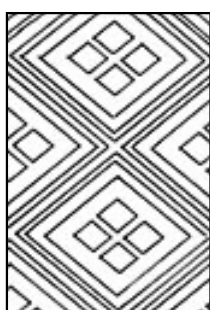
j 浮線綾文



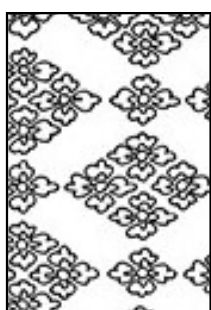
g 牡丹唐草尾長鳥文



e 輪無唐草文



c 三重櫛文



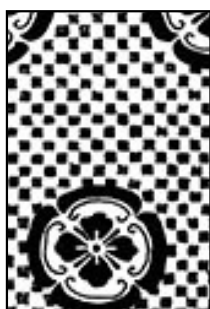
a 幸菱文



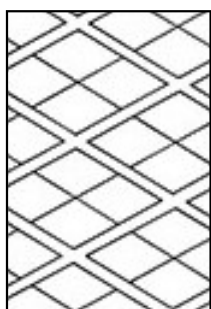
h 小葵文



f 轡唐草文



d 窠に霞文



b 四菱文